

平成 29 年度 第 7 回 国家資格キャリアコンサルタント試験

(JCDA) 実技試験 (論述) 解答例 (中里)

[問い 1] 事例 I と II はキャリアコンサルタントの対応の違いにより展開が変わっている。事例 I と II の違いを下記の 5 つの語句を使用して解答欄に記述せよ。(経験 客観視 自己概念 焦点 価値観) (15 点)

事例 I では、CL の「上司に怒られた」という現実自己と、「自由闊達」という理想自己とのズレからくる自己概念の不一致に対し、Cct が CL 自身の姿を外在化し客観視させることで、CL 自身に気づきと自己の価値観の修正を促しているため、相談が展開している。一方、事例 II では、Cct は年齢や転職、過去の経験など現実的問題にのみ焦点を当て、Cct が独自の価値観で「失敗」「不満」という否定語を使うことにより、CL の内的な思考を阻止し、相談は展開せず解決へと繋がっていない。(手書き 6 行)

[問い 2] 事例 I の Cct3 と事例 II の Cct7、Cct8 のキャリアコンサルタントの応答が、相応しいか、相応しくないかを考え、「相応しい」あるいは「相応しくない」のいずれかに○をつけ、その理由も解答欄に記述せよ。(15 点)

事例 I Cct3 相応しい

CL の主訴である「転職して早々に辞めようと思っている」のきっかけになったエピソードについて尋ねることで、CL の内省を促し、コンサルティングが展開していく応答である。

事例 II Cct7 相応しくない

「4 回目の転職に失敗」という言葉を Cct が使うことで、CL の内的感情を劣等に方向付ける応答であり、CL の内省が遮断され、クライアント中心でない応答である。

事例 II Cct8 相応しくない

CL の感情に焦点を当てることなく、Cct 独自の価値判断で「辛抱して我慢してみる」ことを提案をしているため、CL 自らが問題解決に向かうことを阻止した応答である。

[問い 3] 事例 I ・ II 共通部分と事例 I において、キャリアコンサルタントとしてあなたの考える相談者の問題と思われる点を解答欄に記述せよ。(10 点)

過去 4 回の転職を振り返ることなく、「自由闊達な職場で働く自分」という理想自己にとらわれ、自己理解が不足している。また、自身の理想を職場に持ち込み、会社が求めている働き方について上司などに尋ねることなく、コミュニケーションや仕事理解が不足している。

[問い 4] 事例Ⅱのやり取りについて、あなたなら今後どのようなやり取りを面談で展開するか、具体的に解答欄に記述せよ。(10点)

新しい職場で、「やれることからやっ払いこう」という姿勢は支持しつつ、今までの働き方について職務の棚卸しを提案し、自身の強みやスキルについて明確にすることを勧める。併せて、会社はどういった人材を求めているのかについて上司や人事部で確認することで、職場のニーズに合った CL の働き方への気づきを促し、CL が職場で自身の能力やスキルを活かし、前向きに働いていけるよう支援していく。

AG HUMAN SERVICE CO., LTD.